

<資料>

保健師養成における乳幼児の発達に関する学習プログラムとその協力のための育児家庭の登録システムの開発 ～平成31年度教育向上・改善プログラムの実施報告～

工藤 禎子*、明野 聖子*、田中 裕子*

抄録：

目的：保健師養成における乳幼児の発達に関する学習プログラムとその協力のための育児家庭の登録システムの開発をめざし、本学の平成31年度教育向上・改善プログラムとして実施した内容を振り返り、今後の教育方法の参考とする。

方法：保健師養成カリキュラムの一環として、学内の母子保健に関する演習に乳幼児と保護者を募集し招き、学生は約1時間にわたり乳幼児と保護者との交流を持った。本プログラムの評価の方法として、学生からのアンケートを質的、量的に分析し、プログラムへの協力家族のアンケート記述は質的分析をした。

結果：学習目標1の「子どもの発育・発達の理解」について、学生全員が「とても役立った」と回答していた。学習目標2「母親の生活や育児への思いの理解」と3「乳幼児健診・保健師のあり方の理解」については、「とても役立った」が12名、「まあ役立った」1名であり、概ね肯定的な評価であった。協力家族からは、学生の教育に役に立てたことの肯定感に加えて、学生の積極性を求められていた。

考察：学生が乳幼児に触れる体験を増やす学習プログラムが有用であることが明らかとなった。今後のプログラムの実施において、学生の準備を高めることおよび実習室のセッティングなど物理的環境の改善の必要性が明らかとなった。

キーワード：保健師教育、母子保健、乳幼児健診、公衆衛生看護学実習

I 緒言

現代の少子化に伴い、看護学生が乳幼児に接する機会は少ない状況となっている。母子保健に関する講義等で、乳幼児の発育・発達を教授しているが、学生にとっては具体的なイメージを持つことが困難で、机上の知識にとどまることが多い。

文部科学省・厚生労働省による公衆衛生看護学の教育における「卒業までの達成基準¹⁾」には、実習のなかで乳幼児の健診、新生児の家庭訪問を体験することが明記されている。学生は机上で乳幼児の発達や支援方法を知識として学んでいても、乳幼児に関わった体験そのものが少ないため、乳幼児の機嫌や動きに合わせた対応を行うことや、初めて出会う母子に対して専門職としての責任ある言動をとることには、戸惑いと困難を伴う。

そこで、保健師教育に必須の公衆衛生看護学実習において、母子保健事業（家庭訪問、健診、育児教室など）に関する教育向上と学生が乳幼児に触れる体験を増やす学習改善プログラムが必要であると考えた。

今回、北海道医療大学の平成31年度教育向上・改善プログラムにおいて、以下の2つの目的、(1) 学生と乳幼児が接する学習プログラムに協力してくださる育児家庭（以下、協力家庭）の募集と登録システム作成、(2) 実際の学習プログラムの構築と運営（学生が乳幼児と保護者から発達や育児の実践を学ぶプログラムの企画と運営）を掲げ、助成を得ることができた。

本報告では、「保健師養成における乳幼児の発達に関する学習プログラムとその協力のための育児家庭の登録システムの開発（平成31年度教育向上・改善プログラム）」の初年度の1プログラムを振り返り、当プログラムの評価と今後の効果的なプログラム運営について検討することを目的とする。

*看護学科 地域保健看護学講座

Ⅱ 方法

1. プログラムの概要・計画

本プログラムの当初の計画は以下である。

1) 学生と乳幼児が接する学習プログラムへの協力家庭の募集と登録システム作成

周知のための媒体作成と周知（フライヤーの作成、卒業生等へのフライヤーの送付、近隣市町村の保健師を通じての健診受診時の母子への周知）を行い、協力家庭の申込者があった際のデータベース作成をする。

2) 学習プログラムの構築と運営

（1）保健師養成コースの学生が乳幼児と保護者から学ぶプログラムの企画

母子保健に関する講義、及び公衆衛生看護学実習の事前学習として、講義の日程を確保する。

（2）運営

①登録家庭への連絡と授業日程への参加の調整

②事前及び当日の場所と時間、物品等の準備

乳幼児を連れての当別キャンパスへの移動は、時間及び乳幼児と保護者の心身に大きな負担を伴うことを鑑み、事前の連絡・調整を入念に行い、最も負担が少ないと思われる交通手段を選択する。交通費に関して、大学の規定に沿った助成金を活用する。

③準備

【学生への説明、学生が乳幼児に接する準備】

事前からの感染症予防など体調を整える、アクセサリを外す、服装、靴などが乳幼児に害の少ないものとするを伝える。

【環境の整備】

学生が演習を行う実習室にマットをひく、子どもが好きなキャラクターの張り紙やおもちゃ、絵本等を準備した。乳幼児健診会場に準備されているような、身長計、体重計などを設置した。

協力家族の控室として、実習室至近の教室についで立て、飲食やおむつ交換をできるような場を設けるとともに、実習室内において、授乳可能な仕切られたスペースの利用可能性を確認した。

④協力家庭の授業、事前学習への参加

⑤事後の評価（学生、協力家庭、教員の視点からの教育向上・改善プログラムとしての効果の明確化）

3) 期待される効果・将来展望

（1）学生にとって、保健師として求められる母子保健の技術・態度・知識を高いレベルで修得することが可能となり、保健師としての母子保健領域の実践力が高ま

る。

（2）保健師としての資格取得のため学習と現場で求められる実践力の差が縮小され、新人期の適応上の課題が一部緩和される。

（3）協力した母親（育児中の卒業生等）にとって、社会参加、社会貢献による自己肯定感が高まる。

（4）将来展望として、本プログラムが継続され本学卒業の母子保健に関する実践力の高さが社会的評価を得ることにより、保健師としての就職の促進や、実習現場と本学の連携の促進要因となる。

4) プログラム実行期間：2019年4月～2022年3月の3年間

5) 評価方法

学生のアンケートは当日の授業内で記入する時間をとった。協力家族には、当日アンケート用紙を渡し、郵送用の返信用封筒とともに手渡した。

6) 倫理的配慮

学生及び、協力家族に、本報告について報告の趣旨、個人情報保護の厳守、報告内容で個人が特定されることがないことを口頭等で説明を行い了承を得た。

Ⅲ 結果

今回の「触れあいを通して乳幼児の発達と母親への支援方法を学ぶプログラム」の実施科目は、公衆衛生看護活動展開論Ⅴ（母子保健）乳幼児健診の単元である。

この単元の学習目標は以下である。

- （1）子どもの発育・発達の理解を深める
- （2）母親の生活や育児への思いの理解を深める
- （3）乳幼児健診・保健師のあり方の理解を深める
- （4）抱っこ、計測、触れ合いなどの体験から乳幼児と関わる方法の一端を理解する

実施日は、2019年7月中旬の平日の午後で、協力家族は2組（1歳9か月児、7か月児）であった。

1) 学生からのプログラムの評価の分析方法

講義時間のなかで、学生13人が母子との触れ合いをもった直後に、学生が個々に記載したリフレクションシートを内容ごとに整理した。

今回のプログラムに関して学生が最も印象に残ったことは、表1のとおりである

2. 学習目標への効果

今回の学習目標に関しては、表2のように、学習目標

表1 今回のプログラムで最も印象に残ったこと

分類	記述内容
学生の状況、感情	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に子どもを目の前にし、とてもかわいく思った。 ・久しぶりに乳幼児と触れ合うことができて楽しかった。 ・今まで子どもと関わる機会がなく、健診の月例・年齢の児が実際にどんな様子か分からなかった。このプログラムを通じて、どのくらいの成長でどんな様子であるのかを知ることができてよかった。 ・子どもに対する苦手意識があり、母子保健の分野の勉強も難しく苦手であったが、今回のプログラムで実際に子どもやお母さんと接することで座学のみでなく実際の母子保健のイメージ化につながり、非常に貴重な機会だった。
育児中の母親からの学び	<ul style="list-style-type: none"> ・知識がある方でも自分の子どものこととなると不安もあるとわかった。 ・育児不安を軽減して子育てを楽しむためにも、健診における保健師のかかわりが重要であると改めて感じる事ができた。 ・親になると子どもはかわいいだけでなく、それ以上に大変なこともいろいろあるとわかった。 ・話を聞くことで児が泣いている時に思いをくみ取れているかに悩みや大変さを感じていることが分かった。 ・子育てをするお母さんから、子どもや子育てについての生の声を聞いた。
1歳9か月の児について	<ul style="list-style-type: none"> ・1歳9か月の児が想像していたより活発で走り回っていたこと、とても元気ということ（同2件）。 ・児の行動範囲の広さに驚いた。 ・歩いているというより元気に走り回っており事故予防がとても大切になってくるように感じた。 ・色々なものや人に興味・関心が出てきて、たくさんのことを収集していく時期なのだと実感した。転倒やケガにも注意し、環境整備などをする必要があると学べた。
7か月の児について	<ul style="list-style-type: none"> ・7か月ということで泣いてしまうことが多いのかと思っていたが、学生に抱っこされた時も計測時も泣くことなく、どんな様子なのか以前よりもイメージすることができた。 ・身長・体重を測るときおとなしくて驚いた。 ・母親が声をかけたり、あやすことの大切さを学んだ。
児の状況全般	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもさんたちが泣いたり人見知りすることなく過ごしたり遊んでいる姿を見たり触れ合うことができとても学びになった。 ・乳幼児は発育・発達の個性がはっきりしていると感じた。 ・実際に子どもたちが遊んだり、親と関わっている場面をたくさん見られて、発達がどれくらい進んでいるか見る事ができてよかった。 ・7か月と1歳9か月の児の成長・発達を自分の目で見て、違いを確認できたので資料をまとめるだけではなくさらに学びが深まった。 ・子どもが実際にどのような動きができるのかということや発達をみる事ができ、教科書で学んだことと比較することができたので、とても分かりやすくイメージできるようになった。
支援の必要性の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・健診などで母親が医療者の話を聞くことで安心につながることから健診の必要性の理解が深まった。 ・母親の気持ちや育児の実際について聞くことができ、保健師としてどのように関わるべきか考える機会になった。

表2 学習目標に関する母子に関する理解への効果

(n=13)

学習目標	とても役立った	まあ役立った	あまり役立たなかった	役立たなかった
1) 子どもの発育・発達への理解に	13	0	0	0
2) 母親の生活や育児への思いの理解に	12	1	0	0
3) 乳幼児健診・保健師のあり方の理解に	12	1	0	0

表3 体験学習の達成

(n=13)

学習目標	とてもできた	まあできた	あまりできなかった	できなかった
4) 抱っこ、計測、触れ合いなどの体験	9	3	1	0

表4 子どもの発育・発達への理解に今回のプログラムが【とても役立った】の理由

分類	記述内容
実際に見たことの意義	・実際に今できることなどを聞き、興味や言語などの発達段階を理解することができたため（同4件）。 ・実際に子どもを見て、1歳9か月と7か月の子が自分で座っていたり言葉を話せていたり、教科書ではイメージしにくかったことをイメージすることができた（同1件）。
知識と場面の統合	・教科書で見るだけではイメージがつきにくい運動、言語の発達についてまじかで見えて学ぶことができた（同4件）。 ・実際に児と触れ合うことでこれまで学んだ知識を確認することができた（同1件）。 ・実際に遊んでいるところをみることで、できることとできないことが分かった。 ・実際に首がすわっていることや発語している場面をみれた。 ・子どもの様子を見て今まで学習した知識（寝返り、反射、発語）と照らし合わせることができた。 ・ふだん生活している中で乳幼児と関わったり身近に見れる機会がないのでとても役立った。
月例の異なる児からの学び	・2人のお子さんがいたため、それぞれの行動や身長・体重が知れたため。 ・1歳9か月児の食事内容は大人と同じだが、口の大きさなどを踏まえて大きさを工夫する必要性が分かった。

1) の子どもの発育・発達への理解について、全員が「とても役立った」と回答していた。

学習目標2) 母親の生活や育児への思いの理解と、3) 乳幼児健診・保健師のあり方の理解については、「とても役立った」が12名、「まあ役立った」1名であり、概ね肯定的な評価であった。

学習目標4) 抱っこ、計測、触れ合いなどの体験から乳幼児と関わる方法の一端を理解することに関しては、表3の通り「とてもできた」9人、「まあできた」3人、「あまりできなかった」1人であった。

3. 学習目標ごとの評価の理由

1) 子どもの発育・発達への理解に今回のプログラムが【とても役立った】の理由

全ての学生が子どもの発育・発達への理解に今回のプログラムがとても役立ったと答えており、その理由については表4の通りである。

乳幼児の動きを、実際に見たことの意義、知識と当日

の場面の統合、月例の異なる児からの学びなど、これまでの学習だけでイメージがつかなかったことを、実際の体験を通して具体的に理解したことが多くの学生に共通して記述されていた。

2) 母親の生活や育児への思いの理解の効果評価の理由
母親の生活や育児への思いの理解

学習目標2の母親の生活や育児への思いの理解に関する学生の評価の理由は、表5のように「母親の心情への理解」「複数の子どもを育てることへの思いの理解」「子育てサロンの意義の理解」「母親の健診への期待の理解」について、深まりや広がりがみられた。

3) 乳幼児健診における保健師のあり方の理解

乳幼児健診での保健師のあり方については、表6のように「今後の継続的な学習の必要」「母親が安心できる声かけ」「健診の意義の理解」「子供に関わるスキルと計

表5 母親の生活や育児への思いの理解の評価の理由

学生の評価	分類	評価の理由の記述内容
【とても役立った】の理由	母親の心情への理解	<ul style="list-style-type: none"> ・けが予防への配慮をしていると学んだ。生の声を聴くことで不安、大変なことや楽しみなどの本当の思いを感じることができたため（同1件）。 ・実際の児の動き回る様子や表情の変化を見て愛着がわく感覚や楽しさが感じられた。 ・座学で学んだことに加えて、実体験の話を聞くことで理解が深まったため。
	複数の子どもを育てることへの思いの理解	<ul style="list-style-type: none"> ・2人の子供を育てながらということで、もう1人の子供が淋しい思いをしないか、子どものために少しお金がかかっても時間が短い移動手段を選ぶなど、母親が子どものことを思って生活していることを理解したため。 ・2人を世話するのはとても大変で、それぞれの児が安全に暮らせるように色々なことに気を配りながら生活していることが分かったから。 ・2人の子を育てる母として下の子に時間を使ってしまい、上の子が泣いているときさみしい思いをさせているのではないかと思うという気持ちを知ることができた。
	子育てサロンの意義の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・子育てサロンの有効性が分かった。
	母親の健診への期待の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・乳幼児健診では不安や緊張もあるが専門職から言葉をかけてもらうことで安心できることを知った（同1件）。 ・健診に行くまでの交通面の不便や不安があったこと、保健師の言葉で安心したことなど具体的なことを知ることができた。 ・お母さんの健診に対する思いや育児に対する思いを具体的に聞くことができ、今後の実習にいかせると思った。 ・母親がどのような気持ちで健診に来ているかを知ること、保健師として母親にどう接するか、声かけをするかということを工夫することができると感じた（同1件）。
【まあ役立った】の理由	育児の実際の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・実際の困りごとなどを聞けた。 ・育児をするお母さんのイメージがついた。

表6 乳幼児健診における保健師のあり方に関する学び

保健師のあり方に関する学び	記述の概要
今後の継続的な学習の必要	<ul style="list-style-type: none"> ・実際のお母さんの健診に対する思いを聞いて今後の実習や学習、就職後にどう臨んでいくかイメージすることができた。
母親が安心できる声かけ	<ul style="list-style-type: none"> ・母親は育児や子供の成長に対する不安・悩みを抱えているということが分かり、健診などで発達を確認したり、話を聞いてフィードバックすることは子どもの発達だけでなく母親の安心への支援にもなることを再確認した。 ・母親が、健診時、緊張や不安があると話していたため、その心情をくみ取り支えられるような安心できる声かけをしていきたいと思った。（同6件） ・保健師の発言が母親の心理面にとっても影響すると学べた。 ・実際に健診時の保健師の声かけで安心したり、不安が解消されるという話から声かけの重要性を改めて感じた。 ・母親は緊張して健診に来ているので、保健師は児だけでなく母親の気持ちに寄り添い、今後も安心して子育てできるように支援することが必要だと分かった（同1件）。
健診の意義の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・成長発達を見て、母親を安心させるためにも健診があると学んだ。
子供に関わるスキルと計測スキルの向上	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に計測を行うことができ、声のかけ方、あやし方、支え方などの手技も学ぶことができた。 ・実際の身長、体重の測定を見て参考になった。（同1件）。 ・自分（学生）が児の様子を気にしてしまい、しっかり見れなかった。 ・児の成長発達をしっかりと言葉で母親に伝えることが大切。

測スキルの向上」という学びがみられた。

3人、【あまりできなかった】1人であり、その理由は以下であった。

4) 抱っこ、計測、触れ合いなどの体験の程度と理由

体験について、【とてもできた】9人、【まあできた】

(1) 【とてもできた】の理由

学生は、兄の「抱っこを体験できた」「抱っこをして、重さや大きさを体感できた」「抱き心地や皮膚の状態を見ることができた」という『抱っこの体験』に関する記述が多く見られた。

また『計測の体験・見学』については、「計測を子どもが嫌がるかと思ったが、おもちゃや興味をひくものを用いて本人が別のことに意識を向けているうちに計測することで本人の負担を少なく、正しく計測することにつながっているように感じた。」

さらに、「今まで子どもと触れ合う機会がなかったため苦手意識があったが少し苦手意識がなくなった。かわいいと思えた。」のような『子どもとの触れあいからの学生の心情変化』もみることができた。

(2) 【まあできた】の理由

以下のような多様な理由が挙げられた。

- ・抱っこができた (同2件)。
- ・おもちゃを渡してくれたり、抱っこさせてもらった。
- ・抱っこしているときは顔をしっかりと見れるため、コミュニケーションをとるのに重要なことだと思った。
- ・子どもは思っていた以上に元気に動き回っていて色々なものに興味を示していた。
- ・動くために転落しないよう注意が必要と学ぶことができた。

(3) 【あまりできなかった】の理由

一部の学生は、体験があまりできなかったととらえており、その理由から時間や空間上の課題が明確になった。

- ・抱っこしかできなかった。
- ・テーブルを挟むことで距離が遠かったため空間を共有できなかった。

4. 今後に向けてのプログラムの改善点

学生の記述から、今後に向けての改善点として、『環境の整備』『時間の配分』が挙げられた。

1) 環境の整備

兄の動きに合わせた安全確保のため、また、死角を作らず、全員の学生が協力家族と距離感を縮めるために、机の数を最小限にして椅子や畳の上で話を聞けたらよいという意見が出されていた。

2) 時間の配分

さらに、今回は協力家族と兄の負担を考えて、実質1時間程度の交流であったが、学生からは「時間が許すのであればもう少し (子どもと触れあったり母親と話す) 時間が欲しかった。」という運用時間への要望が出された。

5. 協力家族からの意見

協力家族からのアンケートにおいては、以下のような内容が述べられていた。

1) 企画への感想

- ・企画や空間・おもちゃ等の準備に対するお礼
- ・兄の抱っこや身体測定の実体験と、五感を通しての学びの意義
- ・学生が看護職としての将来のイメージを持つことに役立ちたいという願い

2) 学生への将来の期待

- ・現代の乳幼児を取り巻く環境の複雑さを理解してほしいという願い
- ・乳幼児にとっての母親の関わりの重大さを理解してほしい
- ・現代の母親像は一人ひとりの個性や価値観が多様であり、向き合う専門職も相応の対応が求められる
- ・将来の保健師との交流をできたことはよい体験だった

3) 演習場面の学生への期待

- ・母親の支援方法についてもっと伝えたいことがたくさんあった
- ・限られた時間で伝えることが難しいが、毎日24時間、365日休みなく育児をしている思いを聞いてほしい
- ・保健師からの「大変だよ、でもお子さんはこんなに成長しているよ。大丈夫」の一言に救われることを知ってほしい
- ・母親から子育ての悩みや不安を聞く方法を深めてほしい
- ・母親の気持ちが軽くなるようなアプローチを学び、一つでも手ごたえを得ると、学生の自信につながるのではないか
- ・学生が笑顔で関わっていた。もっと積極的に質問が出たら学びが深まったのではないか

4) 事前学習の必要性

- ・演習前に、月例に応じた兄の特徴や親の悩みの自己学習があるとより学習効果があがるのではないか
- ・母親に前もって学生からの質問や情報を流しておけば演習の目的も考慮しつつ準備できるのではないか

5) 演習環境の整備

- ・子どもと同じ目線で座って交流できるとよい
- ・おむつ替えの場所が安全であってほしい

IV. 考察

保健師養成における乳幼児の発達に関する学習プログラムとその協力のための育児家庭の登録システムの開発をめざし、本学の教育向上・改善プログラムとして、学内で子育て中の母子と学生が交流する演習を初めて実施した。学生と協力家族からのアンケート記述内容の分析から、学生が乳幼児に触れる体験を増やす学習プログラムが有用であることが明らかとなった。

全国保健師教育機関協議会教育課程委員会では、親子保健活動における公衆衛生看護技術の体系化²⁾に取り組んでおり、支援の基礎として「子どもと家族に関する情報収集」「子どもと家族に関するアセスメント」等を公衆衛生看護技術の項目として挙げている。地域の健康課題が複雑化、重篤化する社会情勢の中で、保健師としての確かな支援を展開するためには、対象者に関する情報収集とアセスメントの技術を高めることは必須である。

現代のような少子社会では、子育て中の母子と接する機会は少ない。現に、今回の演習に参加した学生においても、これまで子どもと関わった経験が少なかったという記述がみられ、演習場面においても子どもとの距離の縮め方には、学生による差がみられた。医療系の学生の多忙な現実をふまえると、生活経験や多様な年代の人々と交流する機会を増やすことの必要性を理解していても現実には容易ではない。

看護基礎教育検討会報告書（厚生労働省,2019）³⁾では、看護学生全体のコミュニケーション能力の向上に加えて、保健師教育について「教育現場において、双方向性の講義やシミュレーションなどを活用した演習、実習と連動した演習等により、更なる教育方法の工夫」が求められている。

今回のプログラムの効果について、母親が語るこれから保健師となる学生への期待、すなわち保健師という専門職が発するポジティブにもネガティブにもなり得る言葉の責任と重みを学生が直に感じられる機会となり、正確な知識と技術の獲得への動機づけになったと考える。

今後の課題として、意図的な学習に向けた事前準備や

プログラム実施後の交流体験と知識・技術の統合の充実により、保健師が乳幼児・母親に支援する際に必要となる的確な情報収集の視点・方法や子育て中の母親のありのままの生活や思いを引き出しとらえるための問いかけなどの技術の向上は引き続き必要である。

保健師が関わる地域の健康課題が複雑化する中、親子保健分野に関しても卒業時の学習到達度を可能な限りあげておく必要がある。保健師教育において、乳幼児の発達に関する的確な情報収集、および、子育て中の家族の生活や思いをとらえる技術を高めるために、今回のような実践的な知識と技術を獲得する動機づけや、意図的な交流体験をもつプログラムが重要で、時機に即したものであったと考えられる。

今後のプログラムの実施において、学生の準備を高めること、および実習室のセッティングなど物理的環境の改善の必要性が明らかとなった。

今後は引き続き、学生と乳幼児が接する学習プログラムに協力して下さる育児家庭の募集と登録システムの作成に取り組む予定である。

謝辞

本プログラムに協力くださったご家族に深く感謝申し上げます。

文献

- 1) 一般社団法人全国保健師教育機関協議会保健師教育検討委員会：保健師教育におけるミニマム・リクワイアメンツ全国保健師教育機関協議会版(2014)、-保健師教育の質保証と評価に向けて、36-37、一般社団法人全国保健師教育機関協議会、2014.
- 2) 一般社団法人全国保健師教育機関協議会教育課程委員会：親子保健活動における公衆衛生看護技術の体系化（第2報）、保健師教育、3（1）、21-34、2018.
- 3) 厚生労働省：看護基礎教育検討会報告書、2019.

Development of maternal and child health education program and
registration system of cooperation families for in public health
nursing
-A report of educational improvement program in 2019-

Yoshiko KUDO*, Seiko AKENO*, Yuko TANAKA*

* Department of Nursing, Community-health nursing